

第8回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「あめふるとき」

千葉県 東京学館高等学校 1年 葛生 明日香



賢治のまちから
高校生★童話大賞

『あめふるとき』

千葉県 東京学館高等学校 一年 葛生明日香

空から落ちる この雨は

何かを求める龍の声

怒りに任せて 雷はなち

喜びたたえて 虹架ける

雨は龍の心を映し

今日もどこかで 歌うたう

ぴた、と指揮棒が止まった。そして、次の瞬間、譜面台に叩きつけられる。

「違う！ そうじやない！」

先生の怒鳴り声に、私はびくんと体を震わせた。

「——すいません」

今まで吹いていたフルートから口を離して、小さな声で私は謝る。とて
もじやないが、恐くて、目を合わせることは出来ない。

放課後の音楽室。今日は、私たち吹奏楽部のメンバーが集まって、合奏
をする日だった。

運の悪い事に、私の座っている席は先生の真正面で、しかもコンクール
でソロを吹く事になっていた。

「亜衣、あのな。そこは、サリーツて言う女の子が、叶わない恋に落ちる
シーンで流れるソロなんだ。うまいんだから、もつと感情を込めなさい！

君には、感情はこもっていないんだ」

「はい……」





けれど、そんなことを言われても、私にはよく理解できなかつた。『叶わない恋』だなんて、経験がない。そもそも、恋愛経験すらないのだ。

「じゃあ、もう一度同じところから」

陰鬱な気持ちで、私はフルートを構えた。

指揮棒が再び動き出す。

「そんなに落ち込むなつて。先生だつて、コンクールが近くて気が立つているんだよ」

帰り道。親友の理絵が、励ましてくれた。彼女も同じ吹奏楽部で、トランペットを吹いている。

「でもなあ」

と、私はため息をつく。それでも、私には何かが足りないんだろう。だから、先生もあんなに怒るのだ。

「理絵、私のソロ、どう思つた?」

「え?」

唐突に尋ねた私に、理絵は聞きかえす。

「どう思つた? 私のソロ。正直なところ」

理絵は、ちよつと困つたように笑つて、

「うーん……。良かつた、と思うよ。すごくうまいし。うん。私には、先生がどうしてあんなに怒るのかが良くわからないもん!」

最後は力強く言つた。

「そつか……。ありがとう」

笑顔を作つて、私は理絵に言つた。

でも、それにはどこか無理があつたのだろう。理絵は少し心配そうな顔をして、

「無理しないでね? ——あ、そうだ! 駅前に、おいしいパン屋さんを



賢治のまちから 高校生☆連語大賞

見つけたんだけど、これから一緒に行かない?」

と誘ってくれた。私は行きたい誘惑に駆られたが、「今日は遠慮しておく。

誘つてくれてありがとね」

と首を振った。少し残念そうな顔をした理絵に、私は少しおどけてつけたした。

「叶わない恋について、研究しなくちゃ」

それを聞いて、理絵はにっこり笑う。

「あはははっ! そつか、頑張れ。私で出来ることなら、何でも言つてね。

——何なら、かつこいい男の子でも紹介してあげようか?」

「気持ちだけもらつておきます。——じゃ、ここで」

「あ、うん。またねー」

駅へ向かう理絵と別れ、私はそのまま細い分かれ道へ入つていった。私の家は、たいして遠くないので、私は歩いて学校まで通つてている。少し歩いてから、私は再びため息をついた。

理絵にはああ言つたものの、私は途方にくれていた。コンクールはもうすぐなのだ。やはり、自分にできる限りの演奏がしたい。

そう思つていたときに、ぽつん、と鼻先に水が降つてきた。

続けて、何粒も。

「えっ! こんな所で雨なんて」

空を見上げてみれば、先程まで晴れていた空が、どんどんと曇つている。いつの間にこんな雲がやつてきたのだろうか。まるでそれは、私の心を映しているかのようだつた。

雨の粒は大きく、これから激しくなりそうだ。そう思つた私は、はつと手に持つたフルートを見た。まずい。楽器はデリケートなのだ。濡らしたらよくない。

あいにく、天気予報では一日中晴れとの予想だったので、傘は持つてき

ていない。

私は、走り出した。確か、この先の林に、小さな神社があつたはずだ。あそこで雨宿りをしよう。

何とか、びしょぬれになる前に神社へとたどり着いた。軒の下に立つて、空へと目を向ける。

雨は激しくなるばかりだ。雲の切れ目が見つからないので、まだしばらくは降り続けるだろう。

ピカッ！

稻妻が空に走った。

「わあ……」

ゴロゴロゴロオン！

「きやつ！」

綺麗な稻妻に見とれた瞬間に、大きな雷鳴が轟く。相当近い。

雨が一層強くなる。

「どうしよう……」

続けて何度も雷が鳴った。この大きさだと、きっとどこかに落ちたに違いない。

そのとき、ピカッと光って、ほぼ同時に音が聞こえた。それも、すぐそばで。

「きやあ！」

すぐそばに、雷が落ちたのだ。私はくるであろう衝撃を思い、覚悟を決めた。

「…………」

唐突に、辺りが静かになつた。雨音も、雷の音も聞こえない。

私は恐る恐る頭を上げる。

そこは、神社だった。先程まで私がいたはずの場所。しかし、その雰囲





賢治のまちから 高校生☆童話大賞

気は打つて変わつて、なんと言つうか……、澄み切つた印象を受けた。

先程まであんなに暗く、稻妻が飛び交つていたのが嘘のように、あたりは明るく、神秘的な木漏れ日が差し込んでいた。鳥居のすぐ前に舗装された道があつたはずなのだが、鳥居自体が見つからない。やけに広くなつた林の中を、延々と石畳の道が続いているだけだ。

その神聖な空氣の中、私は何も言えずに立ち尽くしていた。

「ここは、どこ？」 そんな問い合わせが、喉まででかかった。

「

そのとき、私の耳に、声が届いた。綺麗な澄んだ声で、湧き水を思い出させるような声。その声は、歌を歌つていた。

「——綺麗な歌……」

私は、先程までの戸惑いをすっかり忘れ、その声に聞きほれた。

「——誰か答えて この声に

誰か歌つて この僕へ

僕は独り 誰もいない

僕は独り 誰か来て——

歌詞はめちゃくちゃだつたが、少し哀しそうな声で、旋律はとても綺麗だつた。

よく聞いて見ると、その声は私のすぐそば、小さな神社の中から聞こえる。

私は好奇心にかられて、恐る恐るその建物の扉を開こうとした。

「誰だ！？」

突然、低い男の声がして、私は飛び上がる。先程見たときには、周りに誰もいなかつたはずだ。

訳がわからぬうちに、私は脇から体当たりをくらう。そして、その声の主は、倒れた私の上にのつて、私の顔を見た。



「何者だ？」

低い声でそう唸つたのは、犬だった。いや、狼かもしれない。狂暴な目つきで私を睨む。

「答える」

そのすぐ脇から、別の低い声がした。そつくりな犬がもう一匹出てきて、私へと問いかける。

私は、答えられなかつた。今起きている事が、さっぱり理解できなかつた。

「どうしたの？」

今にも食べられそうな雰囲気の中、ガラスのような声が響き渡つた。

「竜神様。侵入者です」

私から降りて、二匹の犬は頭をその声の主へと下げる。

竜神様？ 私は、ゆっくりと起き上がりてその人を見た。

「わあ……」

思わず感嘆の声が出るほど、その竜神と呼ばれた少年は、現実離れしたはかなげな少年だつた。平安時代の貴族のような、白い狩衣をまとつて、紺色に近い黒髪を肩まで伸ばしている。

その少年は、その金色の瞳を私に向けて、

「だれ？」

と静かな声でそう尋ねた。

「…………」

私は、その少年の顔に見とれていて、問い合わせることを忘れていた。

「だれなの？」

もう一度聞かれて、私はハツとして答える。

「えっと、私は亜衣です」

それでも、その少年の顔から目が離せなかつた。

「二人とも、下がつていいよ」

少年は、二匹の犬にそう命じる。

「しかし……」

「竜神様……」

二匹の犬は渋つた。

「下がつて。僕は、亜衣とお話をしたい」

「はい」

最後に私を睨みながら、二匹の犬は石の台にのぼり、次の瞬間、そこには狛犬が座つていた。

「あ……狛犬だつたんだ……」

「うん。彼らは、僕を守つてくれているの」

いつの間にかすぐそばに来ていた少年に、亜衣は驚く。何の音もしなかつた。

年は、私と同じくらいだろうか。平安時代の貴族のような優雅な身のこなしだ。

「さつき歌つっていたのは、あなた?」

私は尋ねてみる。不思議なものだ。不思議な事が起こりすぎると、不思議なことを不思議だと思わなくなるらしい。

少年はこくんとうなずいた。私は立ちあがつて、

「あなたの名前は?」

と尋ねた。少年は、澄んだ瞳を閉じて首を振る。

「竜神さま」

「そうじやなくて……愛称とか、自分自身の名前のこと」

「もう、彼らしか僕のことを呼ばなくなつたから、忘れてしまつた」

彼らとは、狛犬たちのことだろう。

じやあ、とその暗い気持ちを吹き飛ばしたくて、私はわざと明るく言う。

「じやあ、私は『しおん』って呼んでもいいかな?」





賢治のまちから 高校生☆童話大賞

しおん。薄紫色だと何かの本で読んだ気がする。

少年は、目を見開いて黙った。それを見て、とたんに私は不安になる。勝手すぎたかもしれない。

「あ、ごめん。突然変なこと言つて」

私が謝ると、少年は首を振つた。

「ううん。うれしい。僕は、誰かに名前を呼ばれる事がなくなつてしまつたから」

そういうつて、笑顔になつた。私は、それを見て嬉しくなる。

「良かった。しおんが喜んでくれて」

私は早速その名前を使う。しおんが、くすぐつたそうに笑つた。

「ねえ、しおんは神様なの？」

すっかり緊張が解けた私は、疑問に思つたことを尋ねる。

「わからない。そう呼ばれていたこともあつたけれど、今は、誰も僕を知らない」

「え……？」

よくわからなかつた私は、首をかしげた。

「僕はね、ここで歌をうたうのが仕事なの。僕の声は、雨になつて地上に降りそそぐ。昔は、僕の歌に、植物たちが、動物たちが、そして人間たちが答えてくれた。でも……」

言いながら、彼の目から涙がこぼれる。

「今は、誰の声も聞こえない」

しおんを見ていて、私は、言いようのない悲しみを感じた。

「皆ね、知らない言葉をしゃべるの。知らない言葉で、しゃべつていて、それがうるさいくて、他の声が聞こえないの。人あまり来ない。僕は……独りなの」

私の中で、何かが叫ぶ。それは違う、と。



賢治のまちから 高校生☆童話大賞

「今は、私がここにいるよ。しおんのことを知っているよ」

「私はしおんに声をかけた。」

「うん……。きてくれて、有難う、亜衣」

しおんは、本当に子供みたいな少年だった。竜神といわれているからには、相当長い時間を過ごしてきたのだろう。でも、無垢のまま、こうして歌を独りで歌つてきたのだ。

そのとき、唐突に私は理解した。ああそうか、この気持ちなんだ、と。叶わぬ恋。私は、しおんを好きだと感じている。

「僕ね、人間になりたいんだ」

ごしごしと涙を拭いて、しおんは告げた。独りでここにいるのは嫌だから、と。私も、彼が人間になつてくれたら、どれだけいいかと思う。

その声を聞いた途端、狛犬たちが動いた。

「なりません」

「それはゆるされないことです」

しおんは、再び泣きそうになる。

「何故？ 誰も答えてくれないのに？」

「それが仕事だからです」

狛犬は、石のようない感情がない言葉を言つた。

しおんは、顔を歪め、泣き出しそうになる。それを何とかこらえ、しおんは私を見た。

私は何て言つたらよいのか見当もつかなかつた。それから、視線をあたりにさまよわせて、自分のフルートが落ちている事に気がついた。あれはデリケートなのに。

「そうだ。私のフルートを聴いてくれない？」

私には、しおんをどうすることも出来ないから。

「まあ、たいした力量じゃないんだけれど」



賢治のまちから 高校生☆審議大賞

フルートを取り出して、私は音を出す。それは、この神秘的な空間に響いた。そして、あの、先生にしかられたソロの部分を吹き始める。しおんのために。最後の音を吹ききつて、私はしおんの顔を見た。

「あ……」

しおんは涙をぽろぽろとこぼしていた。

「ねえ、亜衣。僕がここを出られないのなら、亜衣がここにいて」

「それは……」

どう答えればいいのか、私にはわからなかつた。正直、この場所にいたいと思ったけれど、それが許されることなのか、私にはわからなかつた。

「それは、いけません」

「このものにも帰る場所があります」

狛犬たちが言う。

「行かないで！ 僕を独りにしないで！」

その言葉は、私の胸に深く突き刺さつた。

「ごめんね……」

私は謝る。

「私は、ここには残れないと思う。だけど、その代わり、しおんのためにフルートを吹くよ。たくさん。それじゃあ、ダメかな？」

しおんは悲しそうに顔を歪めて、座り込む。

「わかったよ……」

そう言いながら、しおんは私のフルートに手を触れた。

それから、涙を拭いて、顔を上げる。

「必ずだよ。僕は、聞いているから——」

その瞬間、再び雷の音がすぐそばで聞こえて、雨音が戻ってきた。

神秘的な空気は消え、いつもの神社に戻っていた。狛犬は、本当の石に。神社の中には誰もいない。私は、手に持ったままのフルートを見つめた。

そして、そのフルートを、しおんのために吹き始めた。

小雨が降っていた。

私のフルートの音は、音楽室の中に響き渡った。

指揮棒が、止まる。私は、再び怒鳴られるのかと思つて、身構えた。

「うん、感情がこもつていて、良かったよ。その調子で、本番も頑張つてくれ」先生は、それだけ言つて、じやあ次の場所から、と指揮棒を振り始めた。

私は、フルートを吹きながら、微笑む。

しおんのために吹くフルート。今までではコンクールのためにだけ吹いていたけれど、今の私には『しおんのために吹く』という気持ちがある。

叶わぬ恋。私のフルートの音を、しおんは聞いてくれているだろうか？

窓から見える空はいつの間にか晴れ、虹がかかっていた。

空から落ちる この雨は
何かを求める龍の声

怒りに任せて 雷はなち

喜びたたえて 虹架ける

雨は龍の心を映し

今日もどこかで 歌うたう

